

UIFA JAPON NEWSLETTER

■主な内容

- UIFA JAPON 2001 年度
- 通常総会・記念講演会開催のお知らせ
- 第13回国際女性建築家会議
- ウィーン大会情報
- ウィーンへの誘い
- 海外交流の会「ウィーンの都市と建築」
- ゲミュートリッヒなウィーン
- UIFA会員の本
- 「ウィーン会議」資料情報
- ユニバーサルデザインを考える「みんながわかるデザイン」
- 役員会報告



海外交流の会「ウィーンの建築と都市」会場風景

UIFA JAPON 2001年度 通常総会・記念講演会開催のお知らせ

21世紀、新たな時代を迎えたUIFA JAPON、その出発点となる「UIFA JAPON 2001年度 通常総会・記念講演会」が来る6月9日(土)、麹町の弘済会館で開催されます。

本年度は、新世紀のスタートに相応しく1998年の第12回UIFA日本大会に続く、第13回UIFA大会が7月にウィーンで開催されるのをはじめ、Newsletterでもお伝えしたように、UIFA JAPONにおいても北海道、愛知・大阪を中心とした地域での会員の活発な発言や活動が台頭し、これからの新しい活動の息吹が感じられます。

この様な中、この度開催される21世紀最初の「UIFA JAPON 2001年度通常総会・記念講演会」は、今後のUIFA JAPONの新しい行動計画とその方針を決めるきわめて大切な会合です。万障お繰り合わせの上、ご参加下さい。

記

日時：2001年6月9日(土) 13:30~17:45

会場：弘済会館 4階会議室「桜」

東京都千代田区麹町51 TEL 03-5276-0333

プログラム：・総会 13:30~14:10

・記念講演会 14:30~16:30

「Environment of Aged life」

—これからの高齢社会と居住環境—

講師 東京大学教授 長澤 泰先生

・懇親会 16:45~17:45 会議室「蘭西」

(広報)

第13回国際女性建築家会議 ウィーン大会情報

会員の方々には事務局よりウィーン大会の詳細と参加のお誘いが届いていることと思いますが、ここに概要を掲載します。5月1日の早期登録締切までに20名を超す参加申込みがありました。まだ参加登録を受付けています。詳細はUIFA JAPON事務局にお問い合わせ下さい。

- テーマ：Before and After the active life
- 開催期間：2001年7月1日~6日
(7日~9日ポストコングレスツアー)
- 開催場所：Hotel Scholoss Wilhelminenberg
(オーストリア・ウィーン)
- 主な会議スケジュール
 - 7/1(日) 参加者到着、ウェルカムパーティー
 - 7/2(月) 開会式、スタディーツアー(ウィーン市内)、カクテルパーティー
 - 7/3(火) セッション、グリンツインクにてディナー
 - 7/4(水) スタディーツアー(ウィーン現代建築とアート)、展示見学とカクテルパーティー
 - 7/5(木) セッション、UIFA事務局会議
 - 7/6(金) 総括と閉会式、フェアウェル・バンケット
 - 7/7(土) ポストコングレスツアー(メルク、ザルツブルグ) ザルツブルグ泊
 - 7/8(日) ポストコングレスツアー(ザルツブルグ市内) ザルツブルグ泊
 - 7/9(月) ウィーンへ戻り、エクスカーションとしてシェーンブルグ宮殿見学、解散
- 発表と展示
 - 大会テーマに沿った子ども、学生、高齢者のための施設・環境について。または、自国の女性建築家の状況や歴史について。(広報)

海外交流の会 ウィーンの都市と建築

平井 美蔓

ウィーン建築の魅力とは

とある街角で、手をあげてタクシーをとめた。車体の所々に擦り傷がありボンネットが歪んでいるその車に乗りこんで宿のホテル名のメモを運転手に手渡す。愛想よくメモを受け取ったのはくわえ煙草の金髪女性でクラッチをふみこんだ足には金色のハイヒールサンダル。黒皮のミニスカートの脇スリットから黒いメッシュストッキングにつつまれた全脚が大きくあらわれている。真紅の口紅、ハンドルを握る手も真紅のマニキュア。そして助手席には純白のマルチーズが紅いりボンをつけて私に尾をふっている。‘ああ、ウィーンにいたのだ！’と実感した。17年むかしの建築行脚ある日の情景。

19世紀末から20世紀初頭にウィーンに出現した市総合整備計画の一環としてのウィーン市営鉄道施設、郵便貯金局(1904～)、ドナウ運河水門施設、アム・シュタインホーフ・聖レオポルド教会(1905)等の設計者**オットー・ワグナー**の仕事は、建築およびその周辺を職業とする者にとって、眩しくも、また重い魅力をもつ存在だ。

ウィーンの街の魅力にまたふれたくて、UIFA第13回ウィーン世界大会にむけての〈海外交流の会〉に参加した。伊藤哲夫先生は、ヨーロッパの東に偏在するこの都市の歴史を重ね、重ねながら、〈歴史の断片を操作して、再構築してきたところがウィーン建築の特徴であり、異種なるものの共存がその魅力を醸成している〉との要旨を、豊富な資料と予定時間をこえる熱意で展開された。以下にその内容の略記を試みよう。

異質なものをひとつに融合して

1世紀、古代ローマの属州として都市建設が行われたエリアが今日のウィーン1区である。ウィーンの建築家達に度々想起されるローマのはじまり。**フィッシャー・フォン・エアラッハ**設計の**カール教会**(1715～)はローマ、ギリシャ、オリエントの異種要素を混合させながら共存し、グロテスクにならず、建築にさまざまな意味を重複させながら過去の歴史と離れがたく、独特の魅力を放っている。

5世紀から12世紀、古代ローマ都市から中世都市へと変貌するロマネスクのウィーンでは、古代ローマの格子状街路網の上に不規則で自然発生的な街路網による都市が重層していく。ルプレヒト教会(1130～)、シュテファン教会(1137～)等多くの教会が建てられ、物資の中継点として発展をつづけ、都市の拡張、整備が円環状に進み、今日の都市構造を規定している。東西と南北の主要街路一琥珀の道、塩の道による十字形の都市構造はさまざまな民族や文化を交叉させ、受容させていく。

13世紀から15世紀、ロマネスクからゴシックへ移行するウィーンにハプスブルグ家が台頭し、ロマネスクのシュテファン教会(1304～)改築に着手した。既存の外周にゴシック様式による新しい外陣を建設、西側正面ファサードにはロマネスク様式を共存させる手法は多元的なものをつなぐウィーンの街の特性と重なっている。

16世紀から18世紀、バロック都市形成期には二度にわたるトルコの攻撃を内部結束の強化に利用し、領土を

ヨーロッパへと拡げていく王朝の興隆にともない、王宮が拡張される。街は中世的都市景観から宮廷都市景観へと変容していく。**フィッシャー・フォン・エアラッハ**による**シェーンブルン宮計画案**(1696～)は歴史的な建築や庭園を世界中から引用し統合することによって王朝の象徴とする雄大な構想であったが実現しなかった。彼の**カール教会**内部は奥行方向に長軸をおく楕円形空間、そして**王宮図書館**(1723～)(現国立図書館)内部は長方形ホールに、横軸楕円形ホールがくみこまれている。これらの空間を体験する時、あらゆるものをひとつの融合体に創りあげる質の高いウィーンバロックの魅力に痺れるだろう。**ルーカス・フォン・ヒルデブランド**のペーター教会、**ダウン・キンスキー**邸も見逃せぬ逸品だ。その彼による**ベルヴェデーレ宮**は地形を巧妙に取り込み、建築と庭園を見事に一体化させている。

18世紀から19世紀はフランス古典主義の影響を受けた新古典主義の時代と規定される。市民階級が台頭しつつあり、平穏な小市民的住文化を意味する〈ビーダーマイヤー〉の時代でもある。都市人口増加にともない多くの賃貸住居を必要とした。そこに施主の合理的な要求によく答えてそのプロトタイプを開発したともいえる建築家**ヨーゼフ・コルンホイゼル**の存在がある。素晴らしい楕円空間をもつユダヤ教会とショッテン僧院内の図書館が市中にある彼の作品で、この図書館には**エアラッハ**の**王宮図書館**内部の空間骨格と相通じるローマ的空間があり、そのうえどこか親密さや居心地の良さをただよわせている。新古典主義でウィーンの都市建築に大きな影響を与えたのが国会議事堂、美術大学等の設計者であるデンマーク人**テオフィル・ハンゼン**だ。美術史博物館、新王宮等の設計者ドイツ人**ゴットフリート・ゼムパー**は実利、合理主義をかかげて、ウィーンの近代建築成立に深く関わった。

歴史を凝縮した建築空間

ウィーンは**オットー・ワグナー**の存在により、ヨーロッパにおける近代建築の展開に大きな役割を担った。前述の駅舎はウィーンの都市景観を規定し、**聖レオポルド教会**はこの都市のランドマークとなっている。その教会内部空間は金メッキのT型鋼で取り付けられた白いプレートで構成され近代性を感じることができるものの、何故か**エアラッハ**や**ヒルデブランド**のバロック空間の印象に近い。〈装飾は犯罪〉とかかげ、ポチョムキン都市ウィーンを告発してラディカルに近代建築を主張する姿勢の**アドルフ・ロース**はその実践で何を残したか。ミヒャエル広場に建つ彼の複合建築は、無装飾の上階に対し1・2階部分を構成するのはドリスオーダーの大理石円柱による列柱である。装飾は犯罪としながらも、伝統や歴史から逃れられない、いわば文化の脈絡のなかでのロースの建築思考に興味は尽きない。

ウィーンにはさまざまな時代の、密度の高い建築空間が多く、眼前に展開する建築の歴史から逃れることは出来ないという。ウィーンを訪ねる前に、資料のなかでウィーンを訪ねておく必要があるようだ。

ゲミュートリッヒなウィーン

川崎 裕子

ウィーンの雰囲気伝える言葉！

ゲミュートリッヒカイト、ウィーンの雰囲気伝える言葉としてこれ以上の言葉を探すことは難しい。*Gemütlichkeit*、快適なとか、居心地のよいとか、満ち足りた様子や気持ちよく寄り添ってくつろいでいる状態などを表す形容詞の名詞形であるが、ドイツ語らしいその語感はいつも私の心をウィーンへと誘う。

ウィーンにはこれまで4回訪れているが、2回は旅行者としての短期滞在で、あとの2回はそれぞれ約1ヶ月の研修滞在をしている。いずれも9月に開かれたウィーン大学のドイツ語セミナーへの参加であったが、平日の午前中は教室で授業を受け、午後は自由行動、そして週末は小旅行と、自己を拡大する夢のような日々であった。

誰でも参加できるこのセミナーは、長い夏休みを有意義に過ごそうとする外国人市民のために、ウィーン大学が長年試みている生涯学習計画である。ドイツ語普及の意図とともにオーストリア文化の発信も企てており、そのため授業料は安く抑えられ、宿泊施設も休暇で空になった学生寮を用意して、ウィーン生活を直に体験することを奨めている。昨年も知人が参加したが、その趣旨は変わらず、世界各国から多くの人が参加していたという。

私が属したクラスにはヨーロッパは勿論のこと、アジア、北米、遠くはチリーからの参加者がいた。20人のクラスで日本人は私を含めて2人、国籍は10数カ国にもなり、まさにウィーンの国際性を見るようであった。午後は市内見学、建築見学とどん欲に歩き回り、夜はたっぷり出る宿題との戦いであった。

犬さえもウィーン文化の担い手

ウィーンは長きにわたり要塞化した都市として発展してきた。現在のリンク大通りは19世紀にできたが、それはかつての城壁の跡である。このリンクに沿って美しい建築が建ち並び、ぐるりと回る路面電車の中からそれらを観賞することができる。公共機関のチケットはすべて共通で運賃も安い。気に入った場所を見つけたら下車して、少し歩いてカフェで一休み、ここでウィーン人を観察することはとても楽しい。どの国のどの町でも人間観察は興味深い、ウィーンはことさら人々が多様で個性的で、それなりの人生を感じさせる。路上の画家、音楽家、芸人、物売り、それに道行く普通の人、そして犬さえもウィーン文化の担い手となり、独特の光景を作り出している。

食べ物のおいしさも格別である。ウィナーシュニツェルやグラウシェをはじめ、ギリシャ料理、ハンガリー料理、そしてワインは申し分ない。郊外のホイリゲではその年にとれたぶどうの一番搾りワインを水のように飲むことができる。ぶどう棚の下で各国訛りのドイツ語で、新酒を交わしつつ歌い踊ったセミナーの仲間達、プラター遊園地の大観覧車で遊んだ仲間達は今どうしているだろうか。

少し滞在すれば、ウィーンでは自分の気に入った過ごし方を見つけることができる。学んで遊んで、カフェでゆったり時間を味わい、ふつうの日常生活をする、これがゲミュートリッヒである。

「柴又帝釈天付属ルンビニー幼稚園」見学記

定行 まり子

子どもの感性を育む空間

4月7日の午後1時半、柴又駅に集合した一行は、川西さんに導かれ、さくら祭りで賑わう帝釈天参道を抜けて、ルンビニー幼稚園へ向かった。

帝釈天の裏手に位置するルンビニー幼稚園は、広々とした園庭を持ち、シンプルな外観の建物である。1階には、玄関ホール、職員室、吹き抜けの大ホール（遊戯室）と、南側の園庭に面した保育室が一行に並んでいる。2階は、川西さんが子どもに絵本の読み聞かせを行なっている「くまさんのへや」と呼んでいるコーナーと大人向けのゾーンとなっている。

1階ホールにおいて、主任の早崎先生より、建物ができるまでのプロセスについて、お話を伺った。谷口吉生氏は、それまで、幼児を対象とした施設的设计機会がなかったそうだが、幼い子どもほど豊かな感性を持っているので、それを育む空間創りに力を注ぎたい、との思いで引き受けられたとのことである。特に、帝釈天付属ということから、「光あふれる仏の子の育成」というコンセプトに従った設計がなされ、光が自然に入り、土・光・風を四季を通して感じられる空間が創られている。こうした工夫は建物の随所に見られ、トップライトによって、いつでも自然の光が感じられる。また、開放可能であることから、風の流れを肌で感じるができる。また、保育室から園庭へのテラスとの境は1枚ガラスによって、開放的で明るく、保育室と園庭が程良く繋がっている。

目地の深さまで議論して

今回のお話で、最も興味深かったのは、建設時における幼稚園と谷口氏とのやり取りについてである。谷口氏は壁に「ブロック」を積みたいたいと考えていたが、園としては「ブロック」の凹凸は擦過傷の恐れがあるために、反対であった。そこで、レンガタイルを焼いて組み合わせることが採用されたが、目地の深さにまで、議論が及んだという。また、1階ホールは電動式舞台が備えられている。行事の多い幼稚園にとって幕が必要であるが、空間を幕で仕切られることに建築家は抵抗感がある。そこで、利用時以外はすべて巻き上げられる仕掛けとした。さらに、グレーのカーテンを選定したため、それに合わせて、柱の一部、階段の手すりが塗り替えられた。

もう一つ、なるほどと思ったことがある。階段について、一般的な幼稚園では、安全性確保のために縦格子や目隠しを使用するのだが、ここではガラスが使用されており、物を落とすなどのいたずらや危険なことがこれまでに生じていないとのことである。そこで、屈んで、子どもの視線になって眺めてみたが、確かにすべてが見わたせるため、むしろ安心感があり、物を落としてみたいという気にならないのではないかと思った。

このようにして、建築家の立場でどうしても譲れない部分と、園の立場で子どもたちの生活の場としての安全性に配慮したい部分との間で、真剣な議論が重ねられたことが、良い結果を導き出したのだと思われる。空間からの息づかいから、また、個々のディテールの繊細さに触れて、感じとったことである。

■UIFA 会員の本

●小川信子・田中厚子共著

『ビッグ・リトル・ノブ ライトの弟子・女性建築家土浦信子』
(ドメス出版、2001年刊、2,200円+税)

大正時代に夫である土浦亀城とともにフランク・ロイド・ライトのもとで建築を学び、帰国後、昭和初期に住宅設計の分野で足跡を残した土浦信子さんの生涯をインタビュー中心にまとめた本です。タリヤセンやモダンガール時代の写真が多数収録されています。1900年生まれの女性が建築家をめざした勇気とその挫折について、多くの女性建築家の方に読んでいただきたいと思います。



●中善寺紀子著『よみがえる民家』

(相模書房、2000年刊、1,800円+税)

25年間に手がけた民家の改修工事6例の記録です。移築や古材の再利用ではなく、その場で改修して住みつける家づくりの実例を、写真を中心にして紹介しています。良いものは残し、最新の設備で快適な住まいを建て主とともに造る、本当の家づくりの本です。



●ウッテ・ウェストロム、ウイネトウ・カムプマン編 『マーティン・グロピウス・ビルディング修復物語』 (Martin-Gropius-Bau, Die Geschichte seiner Wiederherstellung, Wilmelmu Kampmann and Ute Westron, Prestel-Verlag, 1999)

ベルリンのマーティン・グロピウス・ビルディングの修復の本が、UIFA ドイツ会員のウッテさんから事務局に届きました。1881年にオープンしたこの建物は第二次世界大戦でひどい損傷を受け放置されていたのを1960年代にワルター・グロピウスの主導によって保存されました。1977年に修復計画が始まり1986年に完成、修復を担当した建築家の一人がウッテさんです。印象的なパティオと素晴らしい装飾をもつこの建物の修復模様が、きれいなカラー写真で詳細に記録されています。ドイツ語です。



*海外図書の購入は、インターネットのamazon.comを利用すると便利です。クレジットカードを用いてオーダーすると1ヶ月程度で届きます。(田中)

■「UIFA ウィーン大会」資料情報

事業部会がウィーン大会の資料として『Architecture in Vienna』をつくりました。総会の時に販売しますが、郵送を希望される方は事務局にお申し込み下さい(500円+送料)。

■広報日より

北海道旭川での仕事。蝦夷桜のピンク、ライラックの紫、大雪山の白、大地の景観を満喫(飯島)、個展、作品展、コンサート、オープンハウス等情報なんでも編集部宛お知らせ下さい(田中)、「ユニバーサルデザインを考える」の原稿を会員全員の方をお願いしています(井出)、編集会議も皆で力を合わせたクリエイティブ作業です。楽しいです(須永)、親は毎

ユニバーサルデザインを考える

みんながわかるデザイン

三上紀子

いま私達の周りには多くの物があふれ、そしてそれらのほとんどは複雑な形をしており、使用する際に何らかの説明を要するものも少なくありません。認知科学者ドナルド・ノーマンは著書『誰のためのデザイン?』の中で、道具はそれを使ってどのような行為ができるのかわかるようにデザインしておくことが大切だといっています。さらに、「物」ではなく「リアリティー」を、「形」ではなく「アフォーダンス」をデザインすべきだと強調しています。

アフォーダンス(affordance/affordからの造語)という言葉は、ある事物において人が知覚する特徴または現に存在する特徴のうち、それをどのように使うことができるかを決定する最も基礎的な特徴をさします。そして、アフォーダンスは物に限らず人間をとりまく環境そのものの中にその情報が存在しており、それによって人は行動するといわれています。日常使う道具や空間は、誰にとっても簡単ですぐにその場で使えるものでなければなりません。そのためには「(これを使うと)〜できそうだ」「(ここでは)〜できそうだ」というメッセージを、使う人が読みとれる、シンプルでかつ意味のある造形をしていることが求められるのです。

■役員会報告

2000年度第11回役員会

日時:3月23日(金)

出席者:飯島、松川、山田、草野、栗山、東、吉田(洋)

- 議事:1.会員区分、ワーキングチームの活性化策について
2.第23回海外交流の会の総括
3.第24回海外交流の会の内容検討
4.総会特別講演テーマについて
5.会費未納者の取扱いについて
6.第13回UIFA ウィーン大会の対応について
7.2001年度予算の検討

2001年度第1回役員会

日時:4月16日(月)

出席者:飯島、草野、田中、東、松川、正宗、峯、山田

- 議事:1.会費未納者に対する納入督促について
2.この指とまれ「ルンビニー幼稚園見学」の総括
3.第24回海外交流の会について
4.第25回海外交流の会について
5.2001年度第9回UIFA JAPON 総会について
6.第13回UIFA ウィーン大会資料送付について(飯島)

日、仕事と子どもとの関わり(今村)、広報誌発行は財政難にあえいでいます。会費納入にご協力下さい。「この指とまれ」の企画が会員の皆さんから発生することを願っています(渡辺)。

広報担当:渡辺(編集長)、飯島、田中、井出、今村、須永、北本、中村、大高、六反田、柏原